

今回は、小瀬鵜飼プロジェクトの報告です。

## ◇ 小瀬鵜飼について

関市の観光と言えば、伝統の刀鍛冶と小瀬鵜飼が有名です。1890（明治23）年から宮内省直轄となり、現在も3名の鵜匠が宮内庁式部職を務めつつ、古式豊かな伝統漁法を守り続けています。小瀬鵜飼が行われる長良川中流域では、街灯がほとんど見られず、漆黒の闇とかがり火の中、水中にもぐる鵜の姿や鵜匠の手縄さばきを間近で堪能できます。



「清流長良川の鮎」の世界農業遺産認定を追い風に、国内はもちろん海外からも注目を受けるようになった小瀬鵜飼ですが、昨今のコロナ禍の影響で観光客が激減しているそうです。さらに深刻なのが河川環境の悪化であり、水質汚濁や上流からの土砂流などにより、アユの漁獲量は年々減少傾向にあります。

岐阜県の誇る伝統文化であり、観光資源でもある鵜飼。関高校では、自然科学部と地域研究部の合同調査を開始しました。それぞれ学術研究としてスタートしましたが、素晴らしい技術伝統が未来に受け継がれるためには何が必要なのか。SDGsやまちづくりの観点からも検証していきたいと考えています。

## ◇ 自然科学部の調査

自然科学部は、2015年以降、東山動物園でゴリラ群の行動観察を継続してきましたが、コロナ禍によって、活動が大幅に制限されるようになりました。そこで新たなテーマとして選んだのが、ウミウの行動観察です。鵜飼に用いられるウは、河川に生息するカワウではなく海岸や河口に棲むウミウです。鵜匠宅で飼育されているウミウのほとんどはオスであり、さらには自然環境とは著しく異なる環境で暮らしています。そのウミウたちが集団生活の中でどのような行動をとるのか、足立陽一郎鵜匠の協力の下、行動観察を継続しています。

## ◇ 地域研究部の調査



捕獲された野生のウミウを飼い慣らし、河川漁労に使役する。すでに古墳時代には始まっていたとされるこの伝統漁法において、現在、どのようなかたちで技術継承がなされているのか。人とウはどのような関わり方をしているのか。地域研究部では、鵜匠さんからの聞き取りを軸に、民俗学的な観点から鵜飼を研究しています。

また、地域研究部の別チームは、富加町・美濃加茂市・坂祝町と連携し、戦国時代の史跡探訪を軸とした歴史観光「夕雲の城ツアー」を企画しています。このツアーの中には、小瀬鵜飼観覧も含まれています。

現在、小瀬鵜飼では、日本刀鍛錬や美濃和紙と組み合わせた新感覚の観光スタイルが提案されています（小瀬鵜飼幽景）。私たちも、この動きに学び、若者やファミリーなど、今までとは違う層をターゲットとした観光提案を考えていく予定です。